

いと伝わらないのです。そのときは、明るい表情で、お母さんの笑顔
をできるだけたくさん見せてあげること、もちろん大切です。

② 英才教育のデメリット（0〜3歳）

乳幼児期は、そのまっさらな脳の状態のうちに、「早くから英才教
育を行ったほうがよいのでは？」と考えるご両親も少なくないでし
う。しかし、成果を期待するあまり、この時期の子どもに難しい知識
を教え込もうとすると、どのようなことが起こるのでしょうか。

0〜3歳の乳幼児は脳機能が未熟なため、いくら難しい内容を教え
られても覚えられないばかりか、脳の変化に伴って、覚えたはずの内
容まで変化していくこととなります。その結果、「間違えても平気な脳」

を育てることになり、成果ばかりを期待されることで、自己保存の本能のしくみから、「自分に自信がもてない脳」を育てることにもなります。

しかし本来、子どもは生まれながらに「知りたい」という本能をもっているので、楽しみながら、新しいことを知るのはいれしいと感じます。子どもにもムリのないペースで、新しいことは少しずつ教え、できるようにしたらほめる。そういうスモールステップの積み重ねが、脳の本能を伸ばし、学ぶことが好きになる子どもを育てるポイントになります。

従って、早期の英才教育は、その内容は何であれ、「何事にも興味をもつ習慣を育む」(1333～1336ページ参照)ことを目標に行うのであれば、メリットは大きいといえるでしょう。この時期の子どもに早期教育を行うのであれば、難しい内容を理解、習得させるという

成果のみに重点を置くのではなく、「いろいろな経験にふれさせるため」という考え方をすすめます。0～3歳の子どもの脳のしくみから考えて、それ以上の効果を望むのは難しいということを、お母さんは知識として、知っておいていただきたいと思います。

③ 「間違えない脳」を育む親子コミュニケーション（3～7歳）

「気持ち伝わる脳」を育むコミュニケーションの次に、子どもの脳が求めているのは、「間違えない脳」を育む親子コミュニケーションです。「間違えない脳」とは、正誤の判断や類似性の判断を司る「統一・一貫性の本能」のことを指します（74～82ページ参照）。文武両道を発揮するために不可欠な空間認知も「統一・一貫性の本能」を基盤とするため、3～7歳の時期に「間違えない脳」を育むことは、と